所長挨拶

これからの医療・医学研究をサポートするために

門川（もんかわ）　俊明（としあき）
（信濃町メディアセンター所長）

信濃町メディアセンターは，他の地区と同様，研究・教育に必要な資料情報を収集，整備し，効果的に提供するということが主たる業務である。しかし，病院を抱える信濃町地区にあって，これからの医療・医学研究をサポートする観点から，独自のサービス提供が必要である。一つは，患者さんへの医療情報の提供，もう一つは，学術情報をキーとした研究支援である。

1　患者さんへの医療情報の提供

医療現場においては，インフォームドコンセントの概念が広がる中，患者さん自身が疾病情報を収集することで，治療方法における意思決定に積極的に介入する機会が増えてきている。初めて病名を告げられたような場合に，外来では十分に病気の説明が聞けないことがあるかもしれない。家に帰ってインターネットで病気のことを調べようと思っても，信頼に足る，最新の医学知識に基づいた情報はなかなかない。慶應義塾大学病院が患者視点の病院として発展するために，2009年１月に外来待合のスペースの一角を利用し「健康情報ひろば」を開設した。図書や雑誌は必要最小限として，コンピュータベースの医療・健康情報を提供した。コンピュータベースの医療・健康情報は，病気と向き合い，あふれる情報の中で戸惑う患者さんの指針（Compass）となれるよう，そして，慶應義塾大学のKOを取り入れて，KOMPAS（Keio Hospital Information & Patient Assistance Service）と名付けた。メインのコンテンツは，代表的な病気の解説であり，患者さんからの問い合わせ頻度の高い，検査，くすり，食事，病院の利用法についても記事も掲載した。また，2009年からは「あたらしい医療」，2012年からは「慶應発サイエンス」というコンテンツも定期的に掲載している。記事の更新，新しい記事の掲載という大変な編集作業を，信濃町メディアセンターのスタッフがおこない，現在，KOMPASのアクセスは月平均40万件になっており，信頼できる医療・健康情報を提供するサイトに成長してきたと感じている。

2　学術情報をキーとした研究支援

近年，大学など研究機関の研究活動評価の目安の一つとして，被引用数トップ１％～10％論文数，h-indexほか論文の引用評価指標が使われる時代となっている。大学においては研究者の業績評価にも，使われている。また，慶應義塾大学がスーパーグローバル事業を推進する上でもこういった引用評価指標が大学ランキングへ与える影響は大きいといえよう。信濃町メディアセンターでは学術研究支援課とも協力しながら，K-RIS，PUREなどにおける，研究者の業績の整備・公開のサポートをしていく。また，今後，科研費などの公的助成を受けた研究の研究成果のオープンアクセスの義務化なども支援していく必要がある。さらには，InCite，SciValなどのツールを使って，研究分野における戦略立案のための基礎データ提供をおこなっていきたい。

ものすごいスピードで進化する，研究評価の様々なビブリオメトリクス，オープンアクセス化，そういう新しい時代の学術情報を集約し，ユーザーである研究者に分かりやすい形で提供することも我々の使命の一つであると考えている。

急速に進んだインターネット技術により，人々が情報を入手することは格段に容易となった。しかし，情報が氾濫する今だからこそ，必要な時に的確な情報を入手するためのサポートや情報の吟味や分析を助ける役割が重要である。「情報」と「人」をつなぐナビゲーションツールを超えた新たな役割を，メディアセンターのスタッフに期待している。